

学習者の声を手がかりに考える地域日本語教室のこれから

— 新富町における体制づくりの試み —

宮崎県地域日本語教育コーディネーター 坊菌 絵里子

1. はじめに

担当地域である宮崎県児湯郡新富町では、約 200 名の在留外国人（技能実習生が 8 割）が生活しており、宮崎県地域日本語教育体制整備事業により、令和 2 年度から地域日本語教室が開催されている。

今年度より担当となり、いくつかの課題が見えてきた。具体的には、教室の開催回数が少なく、学習者や支援者の意識が次回につながりにくいこと、教室の方向性が整理されていないこと、継続のための人材が不足していることが挙げられる。これらの課題は相互に関係しており、県が最終的に目指す「自走」の状態には至っていない。

そこで、本研修では、教室の継続的な開催に向けた体制づくりと、教室内容・方向性の整理を課題として設定した。

2. 実践の内容

今年度の地域日本語教室は 2 回（7 月、2 月）の開催であるため、最終ゴールに至るには時間を要すると想定し、今年度はまず、町が目指したい教室の形について関係者間で協議を行った。

あわせて、今後の教室内容を検討する際の視点として、学習者のニーズを踏まえられないのではないかと考え、過去の学習者アンケートを分析し、その結果を今年度 2 回目の教室内容検討の土台とした。

3. 実践を通して「行ったこと」「考えたこと」「困難だったこと」

<教室の方向性の整理>

関係者間の協議では、町が目指したい教室の形について話し合い、「参加者のコミュニティーづくり（居場所づくり）」「学習者本人が喜ぶ内容」「定期的な開催」「民間団体への委託」「中学校との連携」などのキーワードが挙がった。

「学習者本人が喜ぶ内容」については、過去アンケートを分析することで傾向を把握できると考え、分析した結果、主に以下のニーズが見られた。

- ・日本人との交流
- ・日本語能力の向上
- ・ゲーム（スポーツを含む）
- ・日本の料理
- ・病院での会話

これらから、学習者は日本語で話す機会を求め、日本語学習と地域交流を組み合わせた活

動を望んでいることがわかった。

この結果を町に共有し、今年度2回目の教室では「お菓子づくり」を行うこととした。2月実施のため評価は今後となるが、学習者のニーズを踏まえた内容として位置付けている。

また、次年度以降も、「地域の人との交流」と「日本語学習」を柱に教室内容を検討していく。

<体制づくり>

居場所づくりのためには継続的な開催が不可欠と考え、次年度は教室回数を増やす提案を行っている。日本語教師についても、地域固定ではなく他地域の教師にも参加を呼びかけ、人材不足の解消を図ろうとしている。

学習支援者については、町内中学校との連携を検討し、今回初めて「中学生以上参加可」と案内に明記した。今後は町外からの参加も想定し、近隣市町と連携した学習支援者養成講座の開催も検討している。

実践開始当初は、「教室」そのものに目が向いていたが、地域日本語教室は教室単体で完結するものではないと気づいた。町や県全体を視野に入れて進めることで、教室が地域に自然に存在し、参加者の居場所となる可能性があると考えている。

本実践で進められたことは限られているが、今年度の取り組みが次年度以降の土台となることを期待している。

4. 地域日本語教育コーディネーターとして果たした役割

過去の学習者アンケートを整理し、個別の意見ではなく、傾向として捉え直したうえで関係者に共有した。学習者の声を単なる要望としてではなく、教室の方向性を考えるための判断材料として位置づけることを意識した。

また、将来的な町主体での運営を見据え、コーディネーターが前面に出すぎない関わり方を意識した。必要に応じて提案や補足を行い、最終的な判断は町がすることを大切にした。

単発的な教室内容の検討にとどまらず、次年度以降を見据えた継続的な取り組みとして教室を捉え直す視点を共有し、今後の方向性を考える土台を作ることを目指した。

5. 今後大切にしたい視点と展望

今後も、地域日本語教室を地域の中に自然に存在する場として捉える視点を大切にしたい。関わる人や機関それぞれの意見をよく聞き整理し、共有していくことを続け、次年度以降も教室の体制づくりに引き続き関わっていききたい。